ソウルワールド

桜三里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソウルワールド

【Ｎコード】
Ｎ１０６０ＢＡ

【作者名】
桜三里

【あらすじ】
大手ゲーム会社から発表されたＶＲ－ＭＭＯＲＰＧ、『ソウルワールド』
一千万以上の応募があったクローズドβテストに当たったたらしい我が家の妹様と、何故か一緒にプレイすることに。いや俺部活あるし。え？部活にも勉強にも一切支障なし？そんな夢のようなゲームがあるのかよ
初投稿です。少しでも楽しんでいただければ。

プロローグ

ソウルワールド。

日本どころか世界的に見てもトップクラスの技術力を持つ日本のゲーム会社、『トライアングル・エース社』が、その最新技術を惜しみなく使って作り上げた、世界初のＶＲ－ＭＭＯＲＰＧである。

ＶＲ、つまり『バーチャルリアリティ』という名前からわかるように、仮想現実世界、つまり現実と何ら変わらない感覚でゲームができるという、ゲーム好きにとってはまさに垂涎の逸品だ。

さらにＭＭＯＲＰＧ、大規模オンラインロールプレイングゲームということで、家にいながらにして数多の別プレイヤーと協力をしながらゲームができるという優れものだ。

もっとも、まだ一般には出回っておらず、ネット上では確定情報として囁かれていたものの、実際に企業からは何のアクションもなかった。噂ばかりが先行しているという現状に、ただの都市伝説と化すのもそう遠くないと言われていたのだが。

そんな『トライアングルエース社』から、ついに正式発表されたのが先日のこと。さらに正式なサービス開始まではまだ時間がかかるものの、抽選でクローズドβテスターを募集するとの正式発表があり、ネット上は瞬く間に大炎上した。

その抽選枠は五千人だったらしいが、応募はなんと一千万を超えたらしい。

そして、そんなクローズドβテストが、本日夜１１時より行われる

そうな。

「そういうわけで兄さん、一緒にやりましょう」

以上、我が妹、二ノ宮麻衣から与えられた情報の全てである。
どうして俺は、部活で心底疲れて早く風呂に入りたい状況、玄関先でこんな話をされているのだろう。というか、まだ靴も脱いでない。

「なぁ妹よ、どうして俺は玄関先でこんな話をされているわけだ？」

「私がクローズドβテストの抽選に当たって、端末が届いたんです。一つの端末で最大二人までプレイできるということで、兄さんも一緒にどうかと」

「うん、兄さんとしてはまず『お帰りなさい』かそれに準ずる言葉が欲しかったよ」

「お帰りなさい兄さん。どうでもいいですけど『お帰りなさい』という言葉は丁寧に『帰れ』と言っていると思いませんか？」

ようやく目的の言葉を聞くことができたものの、余計な一言がついてきた。
まぁ、これがうちの妹の通常状態だから仕方ない。

「……で、なんだ。ゲームをしろ、ってことか？　つまりは」

「はい。一緒にやりましょう」

「無理。部活あるし」

「大丈夫です。部活動にも学業にも一切支障はありません」

「はぁ？」

部活にも勉強にも一切支障がないゲームって、一体なんんだ。そんなゲームが存在するなら、世のお母さんは「ゲームばかりしてないで勉強しなさい！」と子供を叱ることはないだろう。

「そうですね……詳しくは夕食の後にお話しします。兄さんもお疲れでしょうし、長い話になりますのでお風呂に入ってからにしましょう」

「兄さんとしては、その気遣いがもう少し早く欲しかったかな」

具体的にはソウルワールドの話を始める前くらいに。

まぁ何にせよ、ようやく俺は解放してもらえるらしい。やっと靴が脱げる。

「では兄さん、お風呂を上がって、夕食を食べたら私の部屋に来てください。そこで詳しく話しますので」

「ああ、分かった。飯食ったら麻衣の部屋に行くよ」

「はい」

そこでようやく、我が家の妹様から解放。

さて、さっさと風呂に入りますかね

妹の部屋にて

風呂から上がって、お袋が作り置きしていた夕食を温めて食べ、俺は二階にある俺の部屋の隣、麻衣の部屋へと行った。

可愛らしく『まいのへや』というプレートがかけられた扉を、軽く二回叩いて開く。当然ながら、向こうからの返事があるわけがない。だって待つわけがないし。

「入るぞ」

「兄さん、その言葉はノックの後に扉を開けずに言うものです」

若干の呆れを孕んだ声で、ベッドに腰掛けていた麻衣がそう注意してきた。もっとも、もう無駄だと分かっているからか溜め息混じりだったが。

「とりあえず……適当にそのあたりに掛けてください」

「おう」

言われた通りに、座布団を敷いてあるちゃぶ台の脇へと座る。麻衣もそれと共にベッドから降りて、俺の右側９０度の位置へと腰掛けた。

それと共に、先程まで読んでいたのだろう分厚い冊子をちゃぶ台の上に広げる。

「まずは……ええと、あれがソウルワールドの端末です」

そう言って麻衣が指さしたのは、2リットルペットボトルより少し大きい程度の機械と、それにコードで繋がっている二つのヘルメットだった。バーチャルリアリティとか仮想現実とか大層なことを言っていたから、もっと大きいのかと思っていたが思いの外小さい。

「まず兄さん、ソウルワールドは夢のゲームです」

「それはもう聞いた。よっぽど凄いゲームだってのは分かったから」

「いえ、そういう意味ではなく、本当に『夢』そのものがゲームなんです」

夢がゲーム？

「どういうことだ？」

「言葉通りですよ兄さん。ソウルワールドは睡眠中のみ行うことができるゲームです。脳波がとうこうとかは私に聞かないでくださいね。分かりませんし」

「それって、疲れ取れるのか？」

睡眠ってのは脳を休ませるためにするものだと聞いたことがあるのだが。

「それは私にも分からないですよ兄さん。ですけど実際、この説明書にはそう書いてますから。でも、もしも説明書の通りなら、部活動にも学業にも一切支障がないでしょう？」

確かにその通りである。夢の中であるというなら、部活には何の影響もないだろう。

勉強？最初からするつもりなんてないから気にしない。

「ふーん……まぁそれなら、大丈夫だな」

「じゃあ兄さん、一緒にやってくれますか？」

「とりあえず……試しに今日はやってやるよ。でも欠陥品で、全然疲れがとれないみたいな状態だったらやらないからな。明日も朝練あるし」

「それでかまいません。兄さんの都合を無視してまで、一緒にやろうとは思いませんから」

うん、殊勝な考えである。常にその気持ちを持っていてほしいものだが、残念なことに玄関先で兄を拘束する程度には俺の都合を無視している気がする。

さて、では早速。

「んじゃ、始めるか」

「兄さんは人の話はちゃんと聞く人ですが、残念ながらちゃんと覚えていてくれない人なんですよね」

はぁ、と大袈裟に溜め息をつく麻衣。俺が何か間違ったことをしたのだろうか？

「さっき玄関で言ったと思いますが、クローズドβテストの開始は

夜11時からです。まだ2時間以上もありますよ」
ああ、そういえばそんなことを聞いたような。
うん、聞いたな。うん。

「じゃああと2時間以上も何するんだ？」

「そんなことは決まっているでしょう兄さん」

ふふっ、と麻衣は微笑む。その笑顔は非常に魅力的で、兄弟であっても可愛いと思えるものだったが。
その手が取るのは、先程麻衣がちゃぶ台に置いた分厚い冊子。

「説明書を一緒に見ましょう」

え？
まじで？
そのやたら分厚い本が説明書？
普通ゲームの説明書ってペラペラの薄いやつじゃないの？

「まずは職業を決めないといけませんね……。私は魔法職にするつもりですけど、兄さんは戦士職の方が好きそうですね」

「うん……まぁ、お前の好きにしてくれ」

「いえ、やはり兄さんの職は兄さん自身が決めるべきです。クローズドβテストでどうせ消えるキャラクターとはいえ、慎重に選ばないといけません」

そういう気遣いいらないから！

って、え？

「へ？　消えんの？」

「ええ。クローズドβテストというのは、そういうものです。言ってみれば一定の期間、色々なプレイヤーがいる状態でのバグ発見だとかそういう仕事をするんですよ。クローズドβの期間が終われば、データはリセットされます。オープンβテストで、改めて一から育成ですね」

「ふーん……じゃああれか、体験版みたいなもんか」

「そんな感じです」

その後も、説明書を見ながら麻衣とやいやい言っていたら、気づけば１１時になっていた。

ログイン

「あと十分くらいでログインの時間ですね」

言いながら、麻衣が端末からコードで繋がったヘルメットを被る。

俺も同じように、ヘルメットを装着。ご大層なコードの数々に対して、感触は柔らかい。これなら、このまま眠ることができるだろう。

「ログイン時間を23時に設定……と」

「なぁ、麻衣」

「どうかしましたか兄さん？」

「いや……確か聞いた内容を考えると、ソウルワールドってのは夢の中のゲームなんだよな？」

「ええ、そうです。どうかしましたか？」

「俺はどこで寝ればいいんだ？」

ここは麻衣の部屋である。当然、お互い思春期であるので同じ部屋で眠るということはない。勿論ながら、ここに俺用の布団など準備しているわけもない。

部屋を軽く見回しても、あるのは麻衣のベッドとちゃぶ台、それにパソコンデスクと椅子くらいのものである。人がもう一人眠るスペースは、当然ながらない。

麻衣は軽く、申し訳なさそうに首を傾げて。

「……床？」

「なんでだよ！　フローリングに直寝しろってか！」

「いや、だって床以外に」

「なんか選択肢あるだろ！　布団持ってくるとか！」

「だって布団敷くのならテーブルとか動かさなきゃいけませんし……」

「そのくらい動かしてくれよ！」

あまりに理不尽な我が妹に、思わずそう声を上げてしまう。

いや、普通人間、床で寝ろと言われたら大抵こんな反応を返すと思う。もしも喜ぶ奴がいるとすればそいつはドMだ。間違いない。

そして俺は当然ドMなわけではない。つーか、妹相手にドMってもう犯罪者の香りしかしない。

ちなみに、俺の寝場所を床に限定しやがった我が家の悪魔は、既にベッドで布団を被って準備万端である。殴りてぇ。

「さて、兄さん。時間ですよ」

「いや、だから俺の寝る場所……」

続きは、言葉にならない。

言いようもない感覚と共に、意識が闇に落ちる。まるで酒に酔った酩酊状態みたいに、足に力が入らない。

足がその力を失い、支えを失った体が床と接触する。
意識を失う瞬間に考えたのは。

（そういえば夜中にトイレ行きたくなったらどうするんだろう）

なんて、どうでもいいことだった。

Now loading……
Log in complete

Welcome to
”soul world”

ログイン（後書き）

これでプロローグ終了です。
次からはソウルワールド内での場面になります

初日　1

体のワイヤーフレームが形作られると共に、慣れ親しんだ自分の体が投影される。
自分の体がワイヤーフレームからできていく一部始終を見るというのも、なかなかシュールな体験だった。

［ソウルワールドへようこそ］

誰もいない空間。地面以外の何一つ存在しない場所に、そんな声が響く。
機械的な女性の声だ。まぁ、野太い男の声に歓迎されるのも嫌だけど。

［まずはプレイヤーネームを入力してください］

アナウンスと共に、目の前に小さなスクリーンが現れる。空中に浮いていて半透明のそれをスクリーンと称していいのかは分からないが。
スクリーンにあるのはアルファベットと数字。どうやら平仮名や片仮名は使えないらしい。
さて、しかし名前となー。
この入力した名前で、これから俺は呼ばれることになるわけだ。変な名前はつけられない。
かといって、あまりに自分らしくないかっこいい名前をつけたとしても、多分呼ばれて気付かない。つまりある程度呼ばれ慣れている

名前にした方がいいだろう。

『お願いですから兄さん、ちゃんとした名前をつけてください。間違ってもトンヌラとかゲレゲレとかつけないようにしてくださいね』

と、ログイン前に麻衣に言われたことを思い出す。

トンヌラとかゲレゲレとか何を言ってるのか分からなかったが、まぁ大体趣旨は理解した。さすがに変な名前をつけた奴と一緒に歩きたくないということだろう。

少しだけ悩んで、スクリーンのタッチパネルに指を伸ばす。

『ＮＩＮＯ』

幼なじみとか、学校でも仲のいい友人は俺のことを『ニノ』と呼ぶ。まぁ、名字が二ノ宮だからなのだが。

だからまぁ、これなら問題ないだろう。

最後にＯＫを押し、そのまま名前が承認された。

［それでは次に、職業を選択してください］

再度出てくるパネル。選択肢は四つ。

・戦士
・魔術師
・商人

・盗賊

明らかに盗賊って職業じゃなくね？という疑問は浮かぶが、まぁそれは仕方ない。昨今のゲームでは盗賊が職業扱いなのだ。

僧侶がないのが少し疑問だが、魔術師に回復タイプの上級職があるのだと麻衣が言っていた。

少し悩んで、選択。

・魔術師

いや、だって折角ファンタジーな舞台なわけだし、魔法使いたいよね？

戦士タイプは戦うことに特化しているものの、魔法は覚えないらしい。でも基本的に勇者って最強呪文覚えるし、基本的には殴るよな。

魔法×戦士＝勇者

うん、我ながら完璧な考えだ。

タッチパネルのＯＫを押し、頷く。

［ユーザーネーム『ＮＩＮＯ』、職業『魔術師』でよろしいですか？］

確認の質問に、ＯＫボタンをぽちっとな。

［登録が完了しました。ランダムで６つ、アビリティカードとスキルカードがプレゼントされます］

え、ランダムなんだ。てゅーかスキルカードって何さ。

［詳しくは右ポケット内にある『携帯電話』を確認してください］

アナウンスに右ポケットへ手をやると、スマートフォンにもう大部分のユーザーが移行した現在に関わらず、二つ折りの携帯電話があった。

開くと、先程の言葉通りにある。

ｎａｍｅ：ＮＩＮＯ

ｊｏｂ：ｍａｇｉｃｉａｎ

ｓｅｔｃａｒｄ

ａｖｉｌｌｉｔｙ

・『高速詠唱Ｌｖ１』

・『魔法威力上昇Ｌｖ１』

・『杖Ｌｖ１』

ｓｋｉｌｌ

・『ファイヤーボールＬｖ１』

・『サンダーＬｖ１』

・『？？？Ｌｖ１』

なんだよ、？って。
選択してみると、『現在のレベルでは使用できません』と出てきた。
そんなもん初期に渡すなよ。

カチカチと色々と携帯電話をいじってみる。
ふむ、これでアイテム使用とかもできるらしい。使用というか、取り出しか。どれだけ大量のアイテムを持っていてもこれ一つで運べるというのはありがたい。

あとは携帯電話の通常機能、他プレイヤーとの通話、と。
とりあえず麻衣の番号は入れとかなきゃいけないな。

あれ？

なんか目の前のタッチパネルにＹＥＳ／ＮＯがある。やべえ話聞いてなかった。

とりあえずＹＥＳを押しておく。
ＮＯだとなんか後が怖いし。

が、そんな俺の予想は、見事に裏切られた。

［ではチュートリアルをスキップします。ようこそ、ソウルワールドへ］

え？

チュートリアルってあれだよな。ゲーム内容を詳しく教えてくれるやつ。

最初の村で「武器はちゃんと装備しろよ」と言ってくる村人的な役割の人が大勢いるイメージの。

それをスキップってことは。

［ではゲームをお楽しみください］

その言葉を最後に、目の前に光が満ちた。

初日　２

瞼を閉じていても感じる眩しさは、数秒程度だった。
恐る恐る薄目を開けると、そこは先程までの何もない空間ではなく、まるで中世ヨーロッパのような石造りの広場。中央には噴水が湧き出て、幾つかのベンチが置いてある。
遠くに見えるのは、尖塔のある厳かな城。突き抜けるような青空と漂う雲の流れは、本当にここが仮想現実空間なのか疑問に思ってしまうほどのリアリティを持っている。
現実と異なる点といえば、辺りにいる人間の格好が誰も皆似たような格好をしていることと、一部の人間の上に黄色の文字が名前として浮かんでいることか。恐らくＮＰＣなのだろう。動いてないし。

さて。

チュートリアルをスキップしてしまったせいで、何をすればいいのかさっぱり分からん。
別に仮想現実空間であるから立っていても疲れるわけではないのだが、なんとなく身の置き所がないため近くの縁石に座る。
とりあえず何も情報がないわけだから、携帯電話でも確認しよう。
画面には、先程見た内容と全く同じものが書かれている。
ｎａｍｅ：ＮＩＮＯ

job：magician　Lv1

setcard

avility

・『高速詠唱Lv1』

・『魔法威力上昇Lv1』

・『杖Lv1』

skill

・『ファイヤーボールLv1』

・『サンダーLv1』

・『？？？Lv1』

magicianの隣にレベルが追加されている以外には何も変わりない。

恐らく設定画面からフィールドへ出たことで、レベルが追加されたのだろう。

itemの項目を確認。

・ウッドロッド

・E布の服

・ポーション　5個

・地図

なんとも寂しい。たったの4つしかない。Eと書かれてあるのは装備済み、という意味か。つまり、ここにいる大多数と変わらない無個性なこの服は『布の服』なのだろう。どうでもいいけど布地以外で作られた服って俺見たことないな。

あとはｆｒｉｅｎｄｌｉｓｔ、ｍａｉｌ、くらいのものだった。残念ながらヘルプ機能はないらしい。

「さて……」

携帯電話の画面から目を離し、嘆息。

「……何すりゃいいんだろ」

どう考えても前途多難だった。

「まずは……うん、あれだよな。装備」

先程見たｉｔｅｍの項目から、ウッドロッドを選択する。

[取り出しますか？]

ＹＥＳを選択し、エンター。
それと同時に、俺の右手へと軽い重量感がかかる。
特に何の演出もなく、俺の右手にはその辺の木の枝のような太い棒、ウッドロッドが握られていた。

これで装備できた、という認識でいいのだろうか。ｉｔｅｍ画面はＥウッドロッドに変わっている。

よし、これで最初の村人の助言、武器の装備はばっちりだ。

「とりあえず……行くか！」

ここでうじうじ一人で悩んでいても仕方ない。

武器も魔法もあるんだから、まずは街近辺のフィールドでレベル上げをするのが定石だろう。

腰を上げ、広場の北門へと向かう。

恐らくチュートリアルを終わらせたのであろうプレイヤーたちが、東門を目指していることなんて知らずに。

初日　3　初戦闘

北門を抜けた先にあったのは、草原だった。

突き抜けるような青空。
地平線まで続く広大な草原。
涼やかに頬を撫でる風。

そこに立って、なんかやたらと血走った目で俺を見てくる1メートルくらいの子鬼。

風景ぶち壊しだった。

「と、んなこと考えてる場合じゃねぇか」

子鬼は明らかにモンスターなわけで、その矮躯に見合った小さめの棍棒を、今にも振り上げて襲いかかってくる直前である。

よし、ここは先制で魔法だ！

「ファイヤーボール！」

杖に力を込め、叫ぶ。
スキルカードにあった魔法だ。多分スキル名を唱えることで、魔法が発動されるはずだ。

…………

えーと。

杖は「いや俺木の枝だしそんな機能ありませんよ」とでも言いたげに、微動だにしない。
当然ながら俺の期待した、杖の先から炎の玉が飛び出してボーンという展開もない。

予想と違う展開に、思わず首を傾げる。

おかしい。
俺魔術師だし、間違いなく魔法を覚えているはずだ。なのに魔法が使えない。
魔法が使えない魔術師なんて、ただの師じゃないか！

と、俺が一人でテンパっている間に、子鬼が棍棒を振り上げてこちらに向かってきた。
体に見合った素早い動きで間合いを詰めてきて、棍棒を振り下ろしてくる。
なんとか混乱しながらも、俺は杖でそれを受け止める。やはり初期

の敵でしかも小さいわけだから、そこまで力も強くない。杖でもなんとか受け止めることができた。

さらに子鬼の連撃。

絶え間なく振り上げられ振り下ろされる棍棒の攻撃を、その都度杖で受け止める。

なんとか防げてはいるが、攻撃手段がない。魔法が何故か使えないし。

つーか。

なんかムカついてきた。

なんで魔法使えないんだよ。おかしいだろなんか色々と。俺のやり方がおかしいのか？だったら教えてくれよ。なんでチュートリアルスキップとかするんだよ。いや確認しないでYES押した俺も俺だけど。

子鬼がもう一度、棍棒を振り上げて。

「だぁぁぁぁっ！　うぜぇっ！」

思いっきり、子鬼の顔面をぶん殴った。

小さな体が跳躍している状態で殴りつけたため、子鬼が後ろに吹き飛ぶ。

子鬼の上に浮かんでいる緑色のバーが、二割ほど減った。

あれ？

なんだ、ぶん殴ったら倒せるのか。武器とか魔法使わなくても。

子鬼が立ち上がり、再度こちらへと向かってくる。

そんな子鬼に向けて、思いっきり杖を振り上げて、そのまま脳天に振り下ろした。

若干太い木の枝みたいな杖が、子鬼の頭へと当たって鈍い音を立てる。緑色のバー、多分ＨＰバーが残り二割まで減った。

「寝てろぉっ！」

そのまま、子鬼の顔面を、もう一度ぶん殴る。

そこでようやく、子鬼のＨＰバーはようやくゼロになった。

［レベルが上がりました］

［アビリティカードのレベルが上がりました］

子鬼が光の粒子として消える瞬間に、そんなアナウンスが脳内に響いた。

ｎａｍｅ：ＮＩＮＯ

ｊｏｂ：ｍａｇｉｃｉａｎ　Ｌｖ２

ｓｅｔｃａｒｄ

ａｖｉｌｉｔｙ

・『高速詠唱Ｌｖ１』

・『魔法威力上昇Ｌｖ１』

・『杖Ｌｖ２』

ｓｋｉｌｌ

・『ファイヤーボールＬｖ１』

・『サンダーＬｖ１』

・『？？？Ｌｖ１』

獲得アイテム

・小さな棍棒×１

・ゴブリンの髪束×１

その後も草原を歩き、ゴブリン（倒した敵はモンスターデータとして携帯電話に自動的に記録される）と何度か遭遇したものの、危なげなく倒すことができた。

ゴブリンはどうやらこちらを発見すると、そのまままっすぐ向かってくるという特徴を持っているらしい。当然ながら黙って接近されるのを待つわけがなく、向かってくるゴブリンの脳天に杖で一撃入れて怯んだところでマウントポジションをとり、顔面を２、３発殴って倒すという繰り返しだ。

はたから見れば弱いものイジメに見えるかもしれない。というか、どう見ても魔術師の戦い方ではなくストリートのケンカ屋である。

だって、顔面殴るのが有効だって分かったわけだし。まっすぐ向かってくるのなら杖でも狙いやすいし。

そして未だに、魔法は使えない。

ゴブリンを倒したあとにも色々やってみたけれど、どうやっても発動できないのだ。

「炎よ、我が求めに応じて爆ぜよ！　ファイヤーボール！」

出ない。

「炎の精霊よ、我に力を与えたまえ！　ファイヤーボール！」

出ない。

「我焦がれ、誘うは焦熱の儀式。其に捧げるは炎帝の抱擁！　ファイヤーボール！」

……出ない。

「放霊の時は来たりて此へ集う。朕の眷属、幾千が放つ漆黒の炎！　ファイヤーボール！」

…………出ない。

と、そんな風に試行錯誤を繰り返したが結局ファイヤーボールが出ることはなく、仕方ないので杖で殴りつつ拳で殴るという肉体派魔術師として戦っている。

てゆーかもう、肉体派魔術師というより格闘家と名乗った方がいいかもしれない。だって基本殴ってるし。

ま、いいか。

とりあえず、そろそろゴブリンばかり単体で倒し続けているから少し飽きてきた。このだだっ広い草原に点々としかゴブリンがいないわけだから、単体としか遭遇しないんだよな。まぁ、二匹くらいならなんとかなる自信はあるが、三匹以上となると厳しいかもしれない。

そう考えてると、単体でしか現れないというのは初心者に対する配慮なのだろう。

なんて、考えてながら歩いていると、気付けば周囲の風景が草原から、やや起伏のある丘陵地に変わっていた。

それと共に、グルル……という唸り声が周囲から響く。

狼。

それも、五匹くらいに囲まれていた。

野良犬よりも一回り大きな体躯と、白銀の毛色が印象的な、雪国にいそうな狼である。初めて見るモンスターであるが、ぱっと見ゴブリンよりも強そうである。

それが五匹。

やばい、俺死んだかも。

ひとまず、五匹から完全に狙われているため、全部を視界に入れながら臨戦態勢を整える。

つっても、杖を構えるくらいだが。

グオォッ！と狼の一匹が吠えると共に、地を蹴る。そのまま素早い動きで、俺との間合いを詰めてきた。
同時に他の四匹も動き、俺に向かってくる。
まずは、最初に動いた一匹。杖の間合いギリギリで、横薙ぎに振るう。杖の先端は見事狼の鼻先に当たり、確かな手応えと共に振り抜く。

キャイン！と犬らしい悲鳴が上がる。
一匹はＨＰバーが二割は削れたか。だがまだまだ四匹いる。休む間もなく別方向へと杖を振るう。手応えはあったが、それと同時に体の三カ所に軽い痛みが走る。

両足と脇腹に、それぞれ一匹ずつ狼が噛みついていた。

本当に噛みつかれたら、この程度の痛みじゃないだろう。恐らく、仮想現実空間であるから痛みのレベルを下げているのだと思える。痛みで動けなくなることはなさそうなため、それは素直にありがたい。

だが三匹に噛まれたことで、俺のＨＰバーも三割ほど削られた。

「くそっ！」

体を振って、狼を引き剥がす。そこまで強い抵抗もなく狼は離れ、それぞれの傷口から出血らしいものはなかった。
なるほど、このゲーム内では傷は残らず、ダメージのみという扱いになるらしい。

杖をがむしゃらに振るい、時に拳を突き出し、狼五匹を相手に立ち回る。

連携のとれた狼の攻撃に、俺のＨＰバーはどんどん削られていく。
狼に俺の攻撃は当たるが、五匹を均等に削っていくようなかたちになるため、なかなか数を減らすことができない。

距離をとり、左手で携帯電話を操作してポーションを取り出す。アンプル程度の大きさしかないそれを飲み干すことで、ＨＰバーが七割程度回復した。

埒があかない。
このままだとジリ貧だ。

だったら。

捨て身でいくしかないだろうがよ！

杖をかなぐり捨て、狼に肉薄する。跳躍して噛みついてくる狼の前脚を取り、その勢いのまま投げ飛ばす！

柔道インターハイベスト8の実力、ナメんじゃねぇぞっ！

そのまま投げた狼を片手で押さえ込み、もう片手で。

殴る殴る殴る殴る殴る殴殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る――

殴り続けている間、他の狼が噛みついてくるが気にしない。

ＨＰバーが赤色にさしかかったあたりで、ようやく狼のＨＰバーがゼロになり光の粒子と化した。

［レベルが上がりました］

脳内アナウンスが響くが、無視して狼を振り払い、ポーションを使用する。
赤にさしかかっていたＨＰバーが回復すると共に、同じ要領で二匹目の狼へ。
それが終われば三匹目、それが終われば四匹目。
ポーションがなくなり、五匹目を殴り倒して、ようやく俺は腰を下ろした。
仮想現実空間であるからか、体に疲れがあるわけではない。その代わり、精神的にはもうダウン寸前だった。
ゴブリン単体相手は飽きるとか言っていた自分を呪いたい。
多対一という状況が、どれほどキツいかよく分かった。痛みが現実と同じなら、とてもじゃないがまともに戦うことはできなかっただろう。
ああ、キツい――
と、顔を上げた、その先に。

血走った目でこちらを見てくる、軽く3メートルはあるだろう巨大な熊が映った。

name：NINO

job：magician　Lv12

setcard

avility

・『高速詠唱Lv1』

・『魔法威力上昇Lv1』

・『杖Lv7』

skill

・『ファイヤーボールLv1』

・『サンダーLv1』

・『？？？Lv1』

獲得アイテム

・小さな棍棒×15

・ゴブリンの髪束×17

・ゴブリンの魂×2

・狼の牙×5

・狼の爪×4

・大剣『狼牙』×1

初日　４（後書き）

筆者は元柔道部ですが、当然インターハイなんて出てませんのでインターハイベスト８がどのくらい強いかは分かりません。

補足として、アビリティカードは付随するものを使用することでレベルが上がります。

主人公の場合はゴブリンに一撃入れたり狼相手に杖で殴ったりしていましたので、杖Ｌｖは上昇しておりますが基本殴っているため職業レベルに比べて伸びが悪いです。他のスキルカード、アビリティカードについては魔法を使っていないため上がっておりません

初日　５　妹との再会

杖を支えに、立ち上がる。
目の前には、血に飢えた巨大な熊。
対してこちらは、ポーションも尽きて回復手段もなく、相変わらず魔法も使えないなんちゃって魔術師一人。

……本格的にやばい。

この熊がゴブリンより弱ければまだ希望があるが、存在感は明らかにゴブリンなんざ目じゃない。狼よりも数倍強いだろう。

杖を構える。
せめて先制――と考えていた時には、既に熊が目の前に迫ってきていた。

ヤバい、こいつ早い――！

杖で防御することもできず、丸太みたいに太い腕が振り下ろされる。
その先端には、するどい三本の鉤爪。

「ぐあっ！」

反応することもできず、吹き飛ばされる。七割程度残っていたＨＰバーが、一撃で残り四割まで減った。

慌てて立ち上がるが、やはり肉薄してくる熊。

無理やり杖で防御するが、膂力を支えきれずに貫かれる。鉤爪が胸をかすめ、そね風圧にのけぞった。

「くっ、そがあっ！」

杖を振り上げ、熊の顔面に一撃入れる。熊は大した反応も見せずに、ギロリと俺を睨みつけてさらに攻撃してきた。ＨＰバーは僅かに削れているものの、注視しなければ分からない程度だ。

俺の視界を、熊の掌が埋め尽くして。

そこで、意識が飛んだ。

※　※　※　※

気がついたら、最初の街の北門に戻っていた。

どうやら、死んでしまったらしい。

「おお勇者よ、死んでしまうとは情けない」と自分で勝手に期待して旅に出したくせに非難してくる王様の前に戻るのかと思っていたが、どうやら出た門の場所がセーブポイントになっているようだ。

ひとまず近くの縁石に座って、携帯電話を開く。

狼から熊に休みなく戦闘シフトしたせいで、アイテム確認してなかった。このあたりで確認しておいた方がいいだろう。

ｉｔｅｍの項目でエンター。

・Eウッドロッド
・E布の服
・地図
・ゴブリンの髪束×１６
・小さな棍棒×１８
・ゴブリンの魂×２
・狼の爪×５
・狼の牙×４
・大剣『狼牙』

……なんか、剣拾ってるっぽい。しかもなんか名前がかっこいい。

選択して、取り出す。

俺の背丈と大して変わらない、刀身の部分に狼をあしらった巨大な剣が現れる。

「うわっ、かっけー！」

もうなんか、この大剣の存在感に比べれば、ウッドロッドなんて本気でその辺にある木の枝だ。武器と言うことすらおこがましい。

携帯電話で能力を確認すると、攻撃力が１９０も上昇するとのこと。ウッドロッドなんて５しか上がらないのに……。

だが、大変遺憾なことに。

「くそ、装備できねー！」

装備できる武器は職業によって決まっているようで、この大剣『狼牙』を装備できるのは戦士職と商人職だけらしい。

魔術師には残念ながら、無用の長物になりそうである。

名残惜しく思いながらも、携帯電話の中へ収納。
せっかく、なんかすげー良さそうな武器だったのに……。

改めて、再度携帯電話で色々と確認。所持金は……２５Ｇ。初期に持っていたのが５０Ｇだったから、半分消えた計算になる。つまり、死に戻りをしたことによりペナルティとして所持金が半分なくなったということか。
その辺は従来のゲームと変わらないらしい。

さらに時間……おおっ、もう夜中の二時を回っている。
朝練があるから、五時半には起きておきたいのだが……探すと、アラーム機能があったので五時半にセットする。

と、そこまで携帯電話を操作し終えたところで。

「兄さん！」

と、俺を呼ぶ妹の声がした。
顔を上げると、目の前にはこちらに駆け寄ってくる、何故か金髪碧眼になってしまっている麻衣の姿があった。

「よぉ、麻衣」

「どこに行っていたんですか兄さん！　チュートリアル終わったら兄さんと一緒に行こうと思っていたのに、どこを探してもいないんですから！」

「え……あ、ああ、えと」

その発想はなかった。

そうか、言われてみれば確かに、顔見知りも誰もいない仮想現実空間。最初は現実の知り合いと一緒に行動し、仲間を探していくというのが常道で王道だろう。うん、そんなことも何一つ考えずに一人でゴブリン殴ってたけどさ！

「もう……一人で寂しかったんですよ！　たまたま一緒のパーティに誘ってくれた人がいたから良かったものを！」

「いや、悪かった。すまん。いやー、ゲームするのって久しぶりだったからさ、ついはしゃいで一人でゴブリン倒してた」

はぁ、と大きく溜め息をつく麻衣。

「兄さん……いえ、やっぱりいいです」

「その『兄さんには何を言ってももう無駄ですね』って感じで諦めるのはやめてほしいな」

「ひとまず、フレンドリスト登録をしましょう。携帯電話出してください」

淀みなくこいつは俺を無視する。まぁ、こっちの都合を考えずに話をしてくるのはいつものことだけれども。

携帯電話の赤外線機能っぽく、フレンドリストを登録する。寂しかった俺のフレンドリストに、プレイヤー『Ｍａｉ』が登録された。

「兄さん、これでフレンドリスト登録されましたので、何かあったら電話してきてくださいね。もし出ないようなら狩り中だと思いますので、その時はメールでお願いします」

「ああ、分かった。ところで……」

携帯電話を閉じて、とりあえず麻衣に魔法の使い方を教えて貰おうと思い口を開くと。

「マイちゃん、もう話終わったかい？　終わったんならさっさと狩り行こうよ」

と、銀の鎧を着た優男が麻衣の肩に手をかけ、馴れ馴れしくそう誘った。

む、と思わず眉間に皺が寄る。

「俺らも暇じゃねーからさぁ。さっさと　続き狩りしようぜ。やっと感覚掴んだとこだからなぁ」

さらにもう一人、こちらは軽装の革鎧にバンダナを巻いた男。
二人に共通するのは、揃って俺に一切目もくれず麻衣にしか話していない、ということか。

「あ、す、すみません。兄さん、ご紹介します。パーティに誘ってくれた、ジャスティスさんとヒーローさんです」

どこをどう見ても、正義（ジャスティス）だとか英雄（ヒーロー）だとか、そんなイメージは欠片も湧かないのだが。

「……どうも」

一応兄として、そう頭を下げるものの。

「なぁヒーロー、さっきの狩りって結構稼げたよな？」

「ああ、同じとこ行くだろぉ？　朝までにはもうちっと、いい装備が買えそうだなぁ」

ガン無視、と。
麻衣の前じゃなければ、ぶん殴りたい衝動にかられるほどに失礼な輩だった。

「え、ええと、兄さん。それじゃ、私は行きますので……」

「ああ、気をつけろよ」

「はい」

何に、とは言わない。

申し訳なさそうに麻衣は一度だけ振り向いて、二人の男と一緒に東門へ向けて歩いていく。

形容しがたい苛立ちを感じながら、その姿を見送った。

ｎａｍｅ：ＮＩＮＯ

ｊｏｂ：ｍａｇｉｃｉａｎ　Ｌｖ１２

ｓｅｔｃａｒｄ

ａｖｉｌｉｔｙ

・『高速詠唱Ｌｖ１』

・『魔法威力上昇Ｌｖ１』

・『杖Ｌｖ7』

ｓｋｉｌｌ

・『ファイヤーボールＬｖ1』

・『サンダーＬｖ1』

・『？？？Ｌｖ1』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1060ba/

ソウルワールド

2012年1月5日18時31分発行